

東大寺法華堂の調査

—第492次

1 はじめに

国宝東大寺法華堂は、三月堂の通称でも知られる東大寺に残る唯一の奈良時代の仏堂である。奈良時代の造営当初は、本尊である不空罽索観音立像（国宝・脱活乾漆造）をはじめとした諸仏が安置される寄棟造の正堂と、その南に礼堂が並んでいたとされるが、鎌倉時代に礼堂を寄棟造に改め、2棟の堂を連結する改造をおこない、現在の姿となった。建物のみならず正堂の諸仏は、奈良時代を代表するものであり、天平文化を今に伝える貴重な文化財である。

今回、東大寺法華堂（以下、法華堂）須弥壇の解体修理事業にともない、2011年12月19日から2012年1月18日まで、須弥壇下の東石の現状を記録するため、奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）が清掃調査を実施した（史跡東大寺旧境内第140次調査）。

史跡東大寺旧境内第140調査（以下、東大寺〇次調査）の成果を受け、法華堂の履歴と構造をあきらかにし、建造物の保存・修理に必要な情報を収集することを目的として、2012年4月10日から5月28日まで須弥壇下の発掘調査を実施した。

発掘調査による掘削土は、すべて3mmと1mmメッシュの篩掛けをおこない、遺物を細大漏らさないように努め、その総数は土嚢袋約1,190袋分に達した。掘削完了後には土層転写と剥ぎ取りを実施し、土壤硬度計を用いて各層の土壤硬度と同じ値になるまで版築技術で搗き固めて埋め戻した。なお版築には、篩掛けを終えた掘削土のうち、版築に適さない砂や礫を取り除いた1,140袋分と、取り除いて生じた不足分は梨目土1.6tを充当した。

調査体制は、宗教法人東大寺が事務を奈良県教育委員会文化財保存課に委託し、東大寺境内整備計画委員会の下に当該調査に関わる部会（発掘調査委員会）が設置された。その指導のもと、橿考研と奈文研が現地調査を担当した。そのため、調査次数は、橿考研（東大寺第141次調査、名勝奈良公園）と奈良文化財研究所（第492次）それぞれ付すこととなった。遺構番号などの表記方法は、橿考研の記述にしたがう。今回の調査については、橿考研による

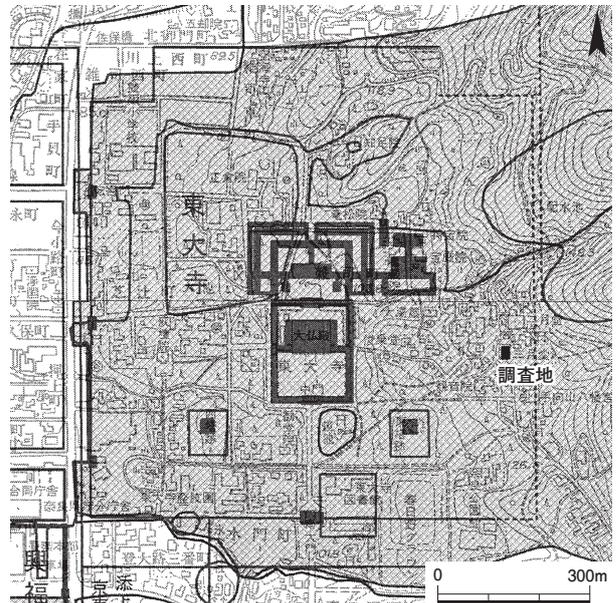


図205 第492次調査地位置図 1:15000

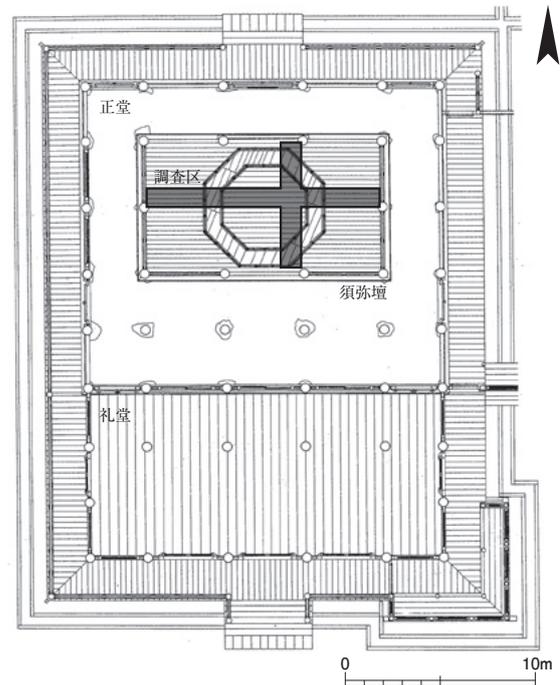


図206 第492次調査区位置図 1:400

概報も刊行されているのであわせて参照されたい（橿考研「東大寺法華堂」『奈良県遺跡調査概報2012年度』、2013）。なお、調査の実施にあたり、東大寺には全面的なご支援を賜った。記して深厚なる謝意を表す。

2 基本層序

法華堂須弥壇下の基本層序は、上から灰白色土（基壇土最上面の土、上下2層からなる）、黒灰色土・黄灰色土（上

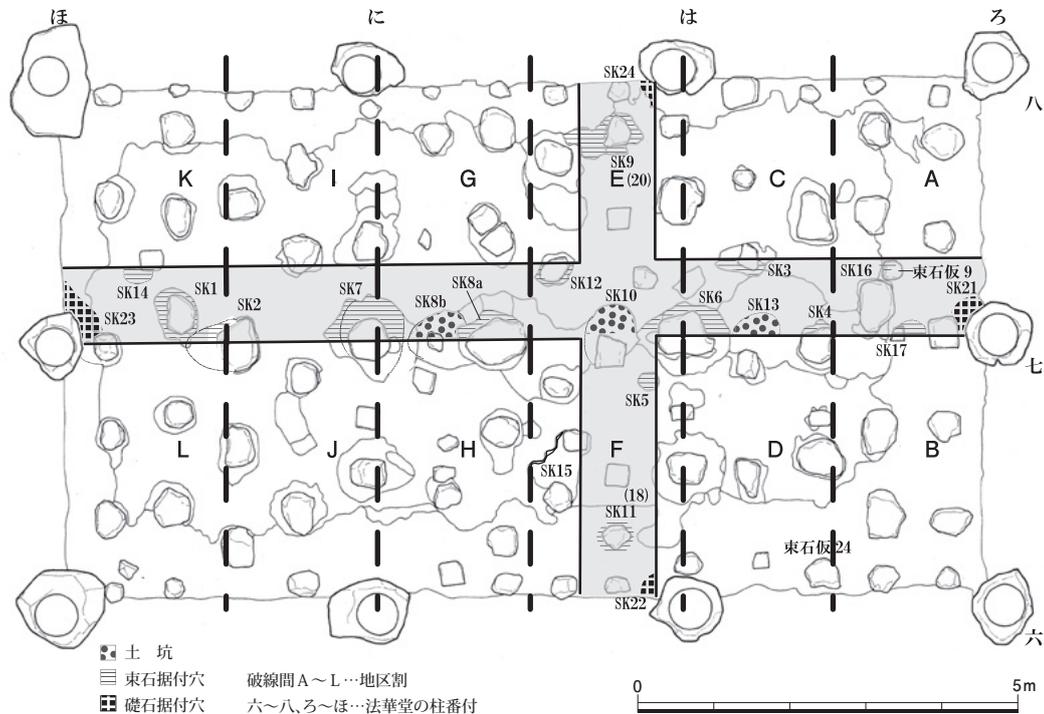


図207 第492次調査区遺構図 1 : 100

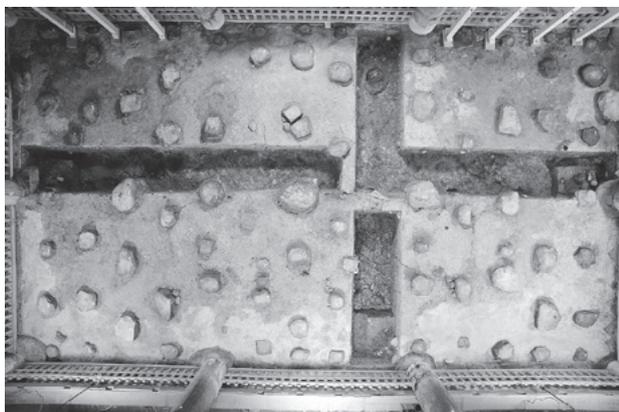


図208 第492次調査区全景 (俯瞰、上が北)



図209 第492次調査区全景 (南東から)

層基壇土、1層の厚さ5cm前後)、暗灰色土・黄灰色土(下層基壇土、1層の厚さ10cm前後)、黄色粘質土(地山)の順に堆積する。灰白色土は、きわめて硬質に締め固められている。下層基壇土は1層が厚く、上層基壇土では薄い傾向にある。また基壇土は、いずれも版築によって搗き固められ、土層断面を観察すると、層理面は搗棒によって緩やかな波型を呈する部分を確認した(図210下)。

なお基壇土は、「は列」より東側が概して湿潤、西に向かうにつれて比較的乾燥するという含水率的な特徴がある。これは、後述するように地下水の挙動と密接に関わると推測できる(177、178頁)。

3 調査区の設定

調査区は、東北側から西南側へ低くなる地形的特徴に配慮し、須弥壇地下の東寄りに長さ7m、幅1mの南北トレンチ、および長さ12.3m、幅1mの東西トレンチの2本を須弥壇下のほぼ中央で直交するように設定した(図206)。調査面積の合計は18.3㎡である。また、須弥壇や建造物への影響を極力避けるため、須弥壇にともなう東石の移動は必要最小限にとどめた。

設定した東西トレンチの南側は、須弥壇の南北の中心で正堂の棟通りでもある「七列」の柱筋にあたる。その

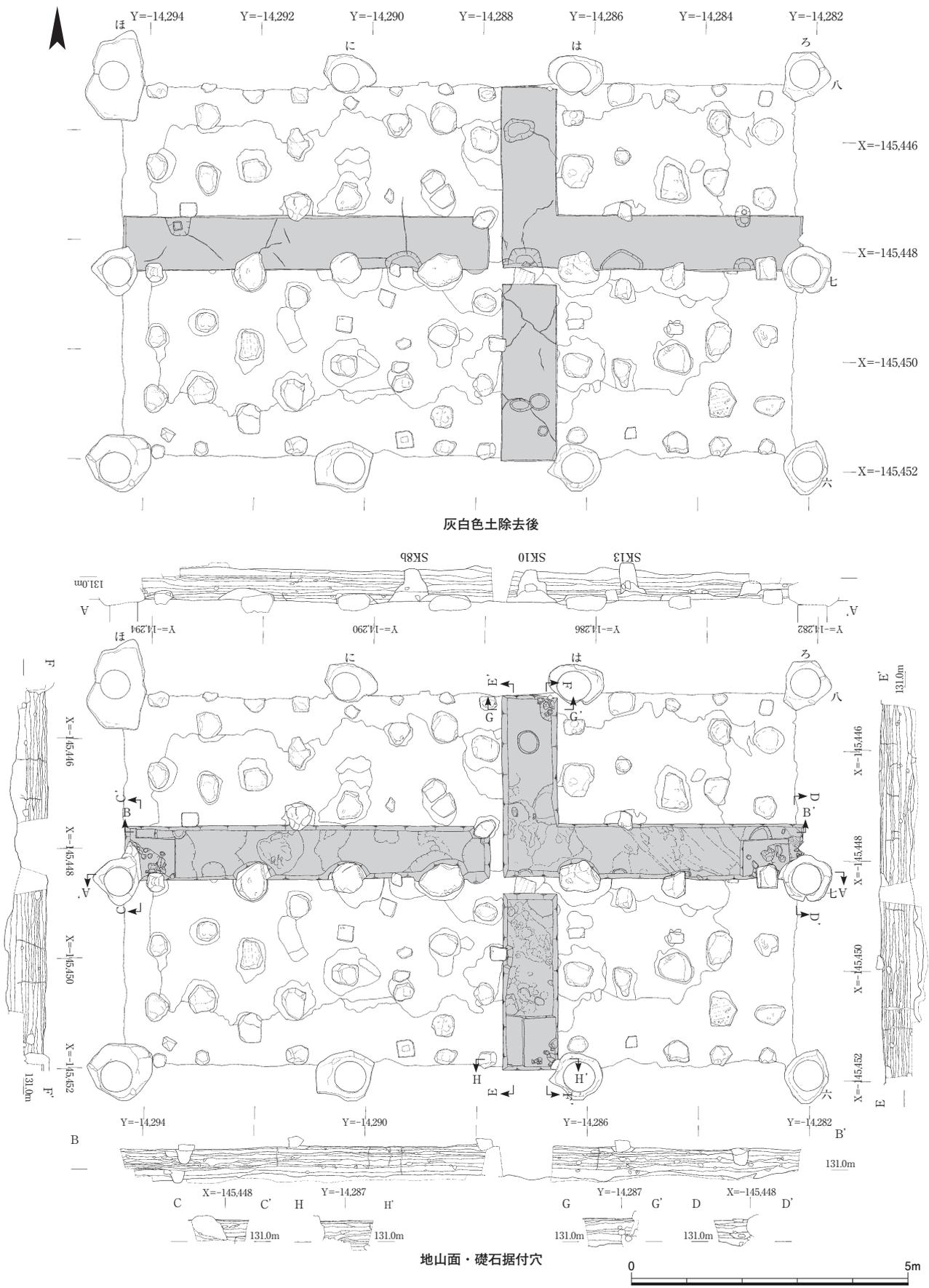


図210 第492次調査遺構図・土層図 1:100

ため、トレンチ壁面に半分程度かかる東石自体は移動せず、東石下は掘削しなかった。南北トレンチについては、近現代に設置されたと考えられる「は列」より西へ1番目の東石列がトレンチにかかるため、これらは記録後にすべて移動した。トレンチの掘削深度は、調査開始当初50cm程度にとどめることを予定していたが、地山面が現地表下50~60cmにあることがあきらかになったため、全体を地山である黄色粘質土まで掘削した。

礎石は、法華堂全体の柱番付をふまえ、南から「六、七、八」、東から「ろ、は、に、ほ」と順に名称を付した。地区割りについては、七列で南北に分け、東西は2mごとに区切った。地区名は、東北から西南方向に向けて、北、南の順にA~L区とした(図207)。なお、遺構記号については、混乱を避けるため檀考研の表記にしたがう。

4 調査成果

検出遺構

須弥壇東石据付穴SK1~4、6~8a、9、12 檀考研が実施した東大寺第140次調査では、基壇上面である灰白色土、および灰白色土から掘り込む東石据付穴をあわせて確認した。第492次調査では、SK1、2、3、4、6、7、8a、9、12を掘削し、土層の状況を確認した。据付穴は、いずれも東石の周囲を一回り大きく掘りくぼめ、深さは約10cmと東石底面より少し深い程度である。東石の据え付けに際して根石を配するなどの造作は確認できず、据え替えなど後世に改変した痕跡も認められなかった。埋土は、比較的締まりが弱く、版築のごとく丹念に締め固めなかったようである。東石と据付穴に生じた隙間などからガラス小玉や金箔が付着した木片や、ビニール片が出土した。ガラス小玉などは、不空鞞索観音立像の宝冠などに伴うものと考えられ、何らかの要因で転落したもののだろう。ビニールについては、近年の東石の補修時の名残か、玉類と同じく埋土の空隙に混入したものかは、にわかに判断できない。

土坑SK8b、10、13 いずれも柱抜取穴と推定される土坑。上面で直径0.6m程度の円形を呈し、底面では直径約0.2m、深さ約60cm。埋土は非常に軟質で、部分的に空洞もみられる。柱抜取穴と推定したが、その性格についてはあきらかでない。SK8bは、8aと重複関係にあり、8bが古い。東石据付穴に先行するが、埋土の状況は東



図211 礎石据付穴SK21(西から)

石の据付穴と同様である。SK8b、10は、法華堂正堂の中心を挟んで東西対称に位置することが注意される。

土坑SK14、16、9(20)、11(18) いずれも追補された東石の下で検出した土坑で、直径0.3m、深さ30cm程。重複関係から東石に先行する掘立柱が存在した可能性がある。また、東石仮9の下面に陶磁器の破片と寛永通宝1点が置かれていたが、これは東石の据え付けにともなって企図されたのだろう。

なお、灰白色土下でも各版築の層理面で遺構検出をおこなったが、顕著な遺構の展開は認められなかった。ただし、灰白色土面から続く地面の亀裂が上層基壇土中で確認できた。亀裂の一部は、下層基壇土でも認められた(図210)。

礎石据付穴SK21~24 いずれも法華堂正堂の身舎柱の礎石据付穴で、SK21が「ろ七」、SK22が「は六」、SK23が「ほ七」、SK24が「は八」の各礎石に対応する。据付穴は、すべて下層基壇土から掘り込まれ、礎石形状にあわせた不正円形を呈する。礎石の大きさからみて直径1m以上、深さ10cm程度。埋土は黄色粘土であり、拳大の礫が多く混じる(図211)。

基壇の築成順序 今回の調査で法華堂の基壇築成の方法があきらかになった。その順序は以下のように復元できる。

①地山の造成 地山は、三笠安山岩が所々に露呈し、標高は、東西トレンチ東端で130.9m、西端で130.9m、南北トレンチ北端で130.9m、南端で130.8mをはかる。トレンチの中央付近もほぼ同じ標高であったため、基壇造成に先行して地山面をほぼ水平に切土したと推定できる。しかし、部分的に最大深さ20cmの凹凸が存在し、造

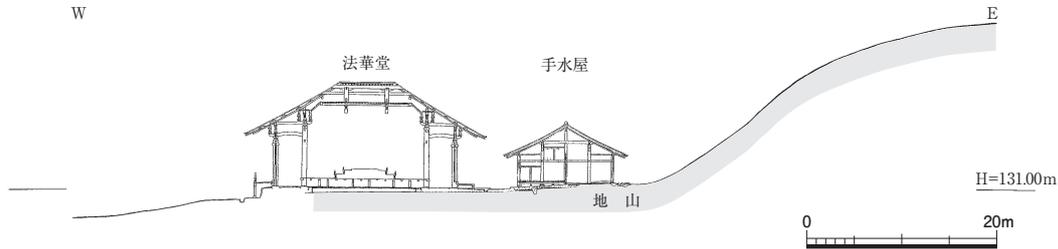


図212 法華堂・手水屋断面模式図 1:800

成前の旧地形の起伏の一部を残しているとみられる。また、この地山面の標高は、1969年におこなわれた法華堂の東側に隣接する法華堂手水屋の地下調査で確認された地山の標高ともほぼ同じであることから、地山の切土は、法華堂から手水屋東側までの広範囲におよんだと推定できる（図212）。

確認された地山面の標高を西側に延長すると、正堂西側の亀腹の中間付近となり、法華堂正堂基壇は、下半が地山削り出し基壇と推測できる。

②下層基壇の版築と礎石の据え付け 地山の造成後、厚さ10cmほどの暗灰色土や黄灰色土を2層ないし3層に分けて、20cmほどの厚さになるまで積む（下層基壇土）。その上面から礎石据付穴を掘削し、礎石を据える。据付穴は、平面形が石の外形に沿って掘り込まれ、深さは10cm程度と浅く、礫混じりの黄色粘土で埋める。礎石の厚みが40cm前後と推定されるため、礎石の大部分は周囲を次の段階の版築（上層基壇土）によって埋め固める。下層基壇土は、あまり硬質に締め固めない版築土である。

③上層基壇の版築と基壇の完成 礎石据付穴の掘削面から上は、幅5cmほどの黒灰色土や黄灰色土を4層ないし5層に分けて、20cmほどの高さまで積む（上層基壇土）。この積土はよく締め固められている。最後に、灰白色土を2層積み重ねるが、これらの層はさらに硬質である。基壇土中に遺構は認められなかった。また、版築土は地山起源の安山岩風化礫を多く含み、とくに最上層の灰白色土層は、凝灰岩片などを含む。

基壇造成の年代 版築基壇の時期については、灰白色土下の上層基壇土中から奈良時代と考えられる土師器皿や須恵器杯蓋、平瓦が出土しているが、全て細片で量も少なく、詳細な時期が特定できない。ただ、基壇土には地山面まで到達する亀裂が散見されることから、この空隙に遺物が混入した可能性がある。よって、基壇土を中世

以降の造成と考えるのは早計である。また基壇土中には、あきらかに中世以降と判断できる土器は含まれておらず、少なくとも灰白色土をのぞく基壇土は、奈良時代の創建当初と考えるのが適当だろう。灰白色土については、古代の土器以外に、中世から近世の所産と考えてよい土師器皿の破片や瓦器片も出土したため、創建当初の基壇土とは考え難い。なお、灰白色土上面を掘り込んだSK16からは、近世末の土師器皿が出土しており、灰白色土の造成がこの時期以前にさかのぼることは確実である。

灰白色土層が中世以降と仮定すると、なんらかの事情で須弥壇下のほぼ全域を10cm程度かさ上げたこととなる。その時期については不明だが、理由として大規模な解体修理などにもなう造作が考えられる。法華堂は、鎌倉時代の正堂と礼堂とを一体化した改造後、明治34年（1901）の半解体修理まで大規模な修理にかかわる明確な記録が認められない。したがって、先述した東石の据え替え時期などを特定することができなかったため、法華堂の修理や改造時期については、今後の検討課題として残された。

經典にみる築壇の作法 不空羂索観音の真言陀羅尼、念誦法、曼荼羅、功德などを説いた『不空羂索神変真言經』（全30巻、菩提流志漢訳）巻第13には、「以牛糞黄土泥摩飾壇上。」とあり、不空羂索観音を奉安する壇を築く際、牛糞を用いることがうかがえる。東大寺法華堂で実際に牛糞を用いたとなれば、法華堂創建当初から不空羂索観音を安置していたことの証左ともなる。その証明には、牛糞と推定するに足るデータを土壤の理化学的分析から導出することが不可欠だが、分析をおこなっていない現状では結論を下せない。ただ、經典の内容と理化学的分析の両側面から考察を加えることにより、安置された仏像が解明できる可能性があることは留意すべきだろう。

さらに、『不空絹索神変真言経』巻第13には、「著白浄服臥置壇上。白衣蓋上。」とも書かれている。これは、壇上に白色の浄服を被せ置くと解することができる。となると、基壇で白色の繊維質の残欠などを確認できた場合、不空絹索観音と不即不離の行法がおこなわれたことの証左ともなる。基壇あるいは須弥壇を造営する際の具体的な作法、あるいは安置された仏像を知る手がかりとして、経典の記載内容と発掘調査成果との対比は、今後の発掘調査に際して念頭に置いておく必要がある。

出土遺物

遺物は、コンテナ換算で土器など2箱、金属遺物1箱、有機遺物2箱が出土した。おもに以下の地区、遺構でまとまって出土した。その数量をみると、C地区では、ガラス小玉3、ガラス玉1、琥珀片、金箔片、E地区ではガラス小玉2、ガラス玉1、F地区ではガラス小玉5、ガラス玉1、金箔片、H地区ではガラス小玉1点、東石据付穴SK3ではガラス小玉3、ガラス玉1、金箔片、東石据付穴SK6ではガラス小玉7、金箔片、東石据付穴SK8ではガラス小玉1、ガラス玉1、金箔片、土坑SK10ではガラス玉1、金箔片、東石据付穴SK18（SK11下層）ガラス小玉2、ガラス玉2が出土した。このうちSK3・6・8・10ではビニール袋が混入していた。

土器・瓦 主な出土土器と瓦を図213・214に示した。1～23、25～30は、上層基壇土から出土した土師器である。杯、皿の細片で時期の確定は難しいが、内面に斜放斜の暗文が認められるので、平城Ⅲまでにおさまらるだろう（15～22）。また、口縁部付近の煤の付着から、灯明皿と判断した個体も複数ある。24は平安時代の瓦器である。上層基壇土出土としたが、詳細な出土状況はあきらかでなく、混入の可能性が高いと考えておく。31～35は須恵器だが、このうち33は杯蓋であり、6世紀末頃の所産か。36～51は、灰白色土や東石据付穴から出土した土師器の杯、皿である。概ね17～18世紀と考えられるが、50・51は10世紀頃とみられる。

52、53は陶器で、52は19世紀頃の土瓶である。54・55は瓦質土器の鉢であろう。

瓦は、巴文軒丸瓦（1）と丸瓦片（2）が各1点、平瓦片（3～6）が3点出土した。軒丸瓦は江戸時代前半、丸瓦と平瓦は古代と判断できる。

土器と瓦に関しては、奈良時代と江戸時代の所産が多く、中世のものは非常に少ない。鎌倉時代の法華堂改造にとまなう造作がおよんでいたのならば、この時期の遺物がある程度出土することが予想できる。ところが、実際には遺物量が少ないことから、鎌倉時代の改造時には、須弥壇に工事の手が及ばなかった可能性も考慮する必要がある。

木製品・金属製品 有機遺物は、部材片や木の削り屑、漆片などがある（図215-1・2）。1は、仏像の一部とみられる文様を彫刻した板状の部材片で、SK8出土。2も部材片とみられ、断面円形を呈する。F区黄色砂出土。両方とも木地に漆を塗布し、金箔を貼る。13～39は玉類で、総数はガラス小玉29点、ガラス玉8点、トンボ玉1点（35）、琥珀玉1点（39）を数える。40～45は金属製品であり、40・41は銅釘、42～45は銅線である。40はA区東石下、41はK区黒色土上面、42はF区灰白色土、43はSK6、44・45はSK15出土である。このほか鉄釘（洋丸釘）も出土したが、近代以降の所産だろう。46～56は銭貨である。寛永通宝が6点、銭文不明の鉄銭が3点、他は明治以降のものもある。このほか、金箔片なども見つかっている。57～60は、縄文時代の無茎凹基式石鏃である。4点あるが、57はK区灰白色土、58はA区、59・60はK区のいずれも下層基壇土から出土した。

（大西貴夫／樞考研・青木 敬）

物理探査と三次元計測

探査の経過 今回の調査に先行して、2011年11月14・15日に地中レーダー探査（GPR）、11月14日に磁気探査、11月9・10日に電気探査を実施した。ただし、以上の探査は須弥壇下の清掃前に実施したが、その後の東大寺第140次調査時に、多数の銭貨をはじめとした金属製品が灰白色土上面から出土した。このことをふまえ、表層付近の金属反応を除去した段階、具体的にはトレンチの掘削を進め、黒灰色土の版築面を検出した2012年4月18日、トレンチ内を対象として改めて磁気探査をおこなった。同日、正堂身舎内を対象とした金属探査もあわせて実施する予定であったが、機器の不調により実施が叶わなかった。

探査方法 GPR探査は、正堂の身舎内、須弥壇の地下東西11.5m×南北5mを対象に実施した。使用したGPR探査装置は、GSSI社製SIR-3000である。アンテナはGSSI

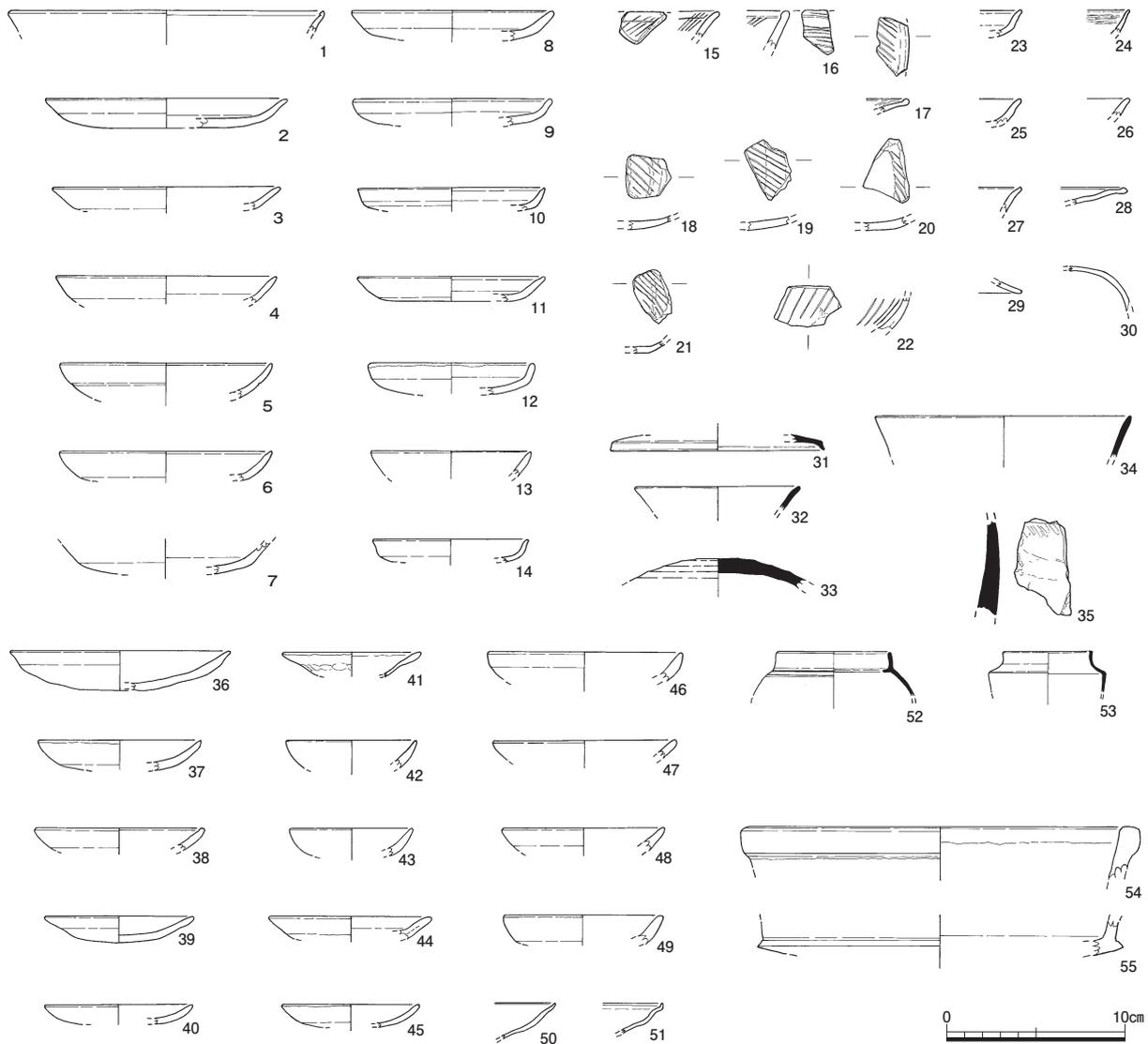


图213 第492次調査出土土器 1 : 4

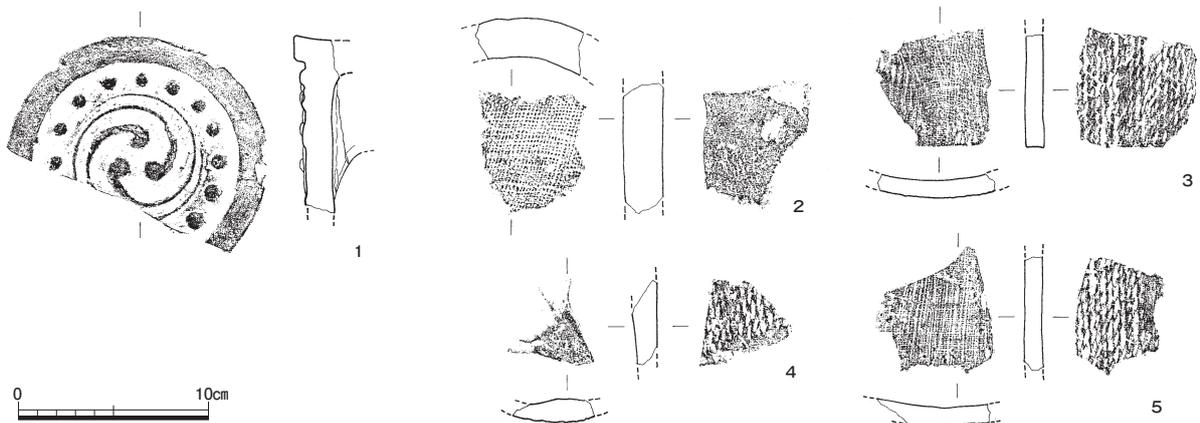


图214 第492次調査出土土瓦 1 : 4

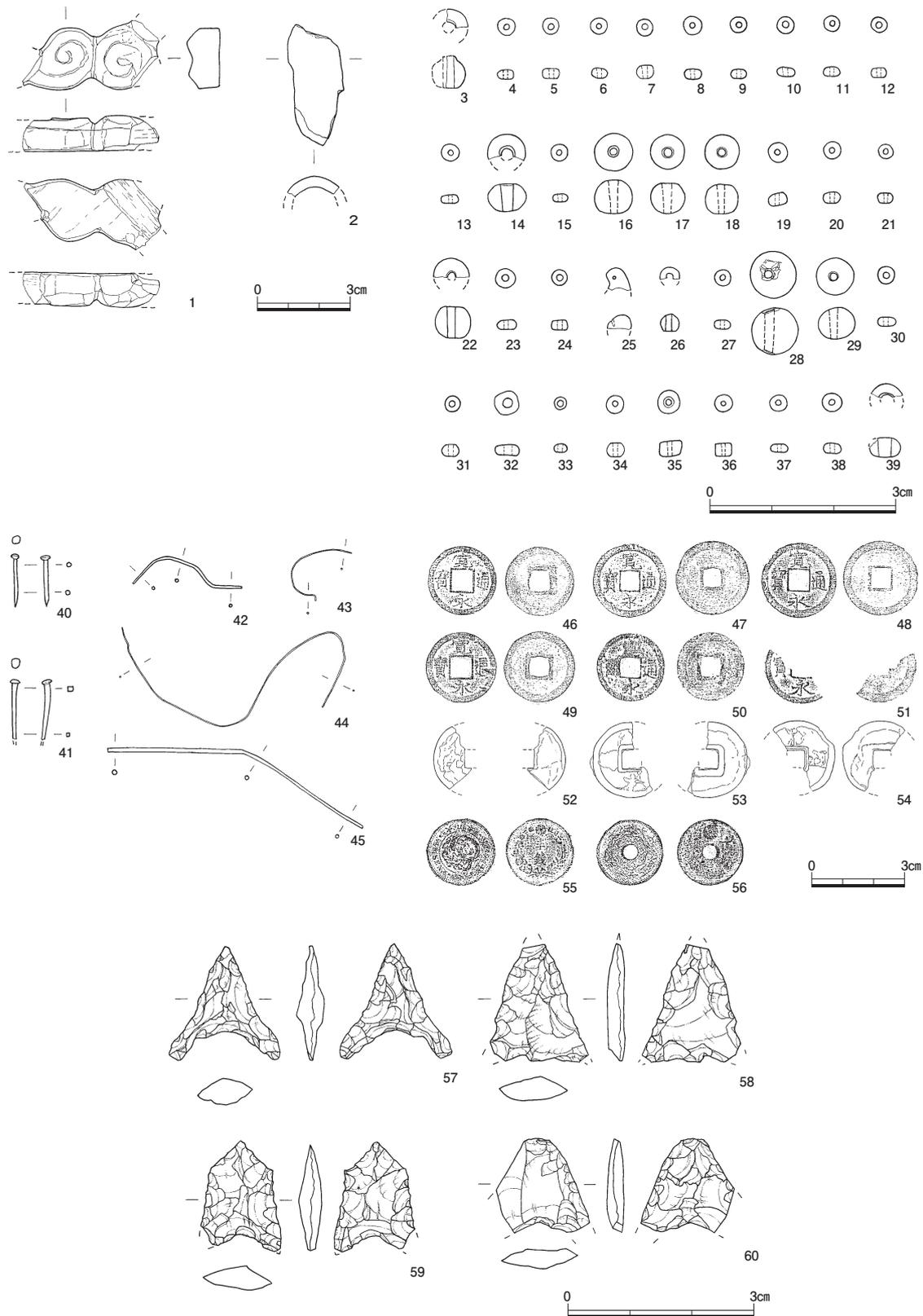


図215 第492次調査出土部材・ガラス玉・金属製品・銭貨・石器 1・2・40~56が1:2、ほかは1:1

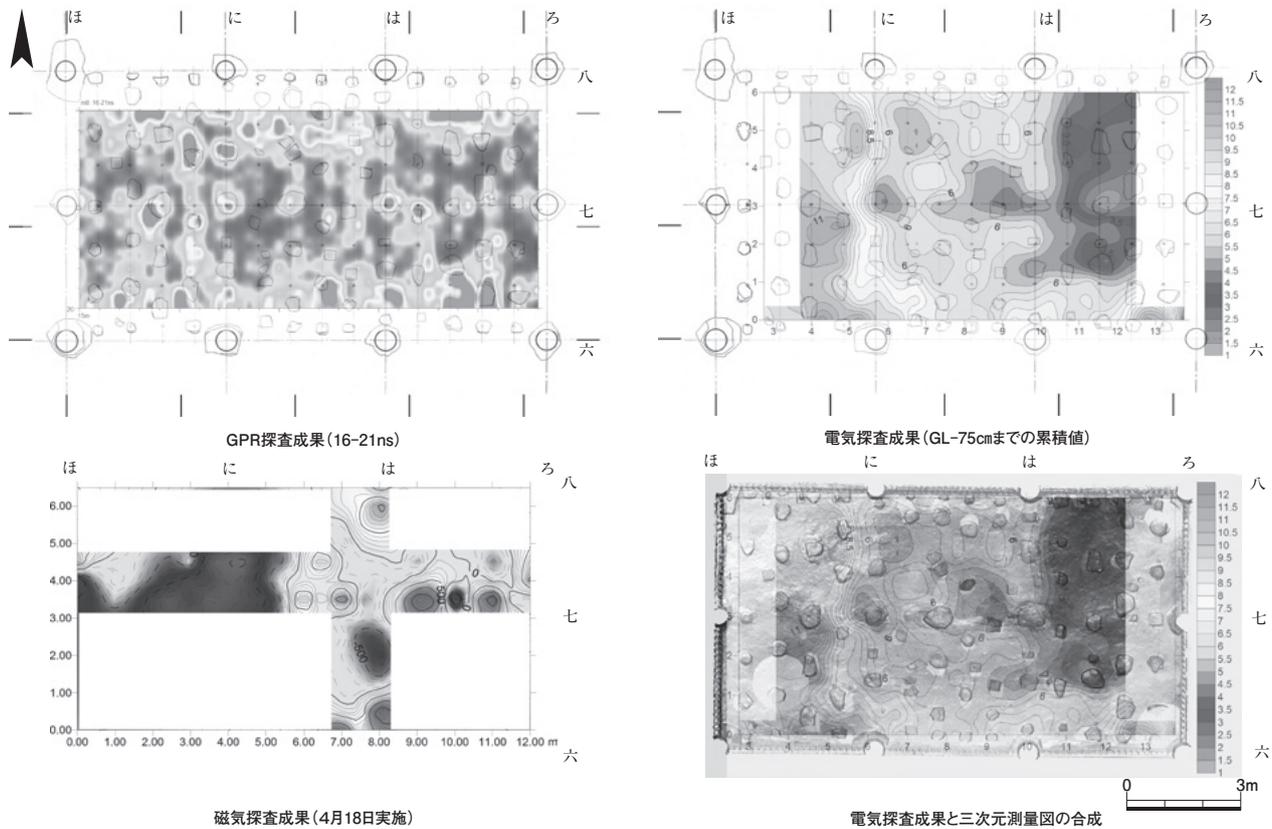


図216 探査成果平面図 1：200

社製400MHzアンテナならびに900MHzアンテナを使用した。このうち900MHzアンテナは、礎石と東石を避けて探査した。アンテナ走査の側線間隔は0.25mである。いずれも探査条件は良好でない。

電気探査は、比抵抗計に電気探査機 OYO（応用地質）HandyARMを使用し、電極配置はウェンナー（Wenner）法による。測線は、南側列柱中軸より0.5m北を基線に、測線方向（東西）、電極間隔（南北）ともに0.5mで走査した。舗装のある部分はジャガイモによる電極を利用し、土の部分はステンレス製の電極を打設した。

2011年11月の磁気探査は、磁力計にフラックスゲート式磁力計 Bartington社製GRAD601-1を用いて、身舎内の東西方向に測線を設定し、測線方向（東西）、間隔（南北）ともに0.5mで走査した。2012年4月18日の探査では、測線をトレンチ内に限定し、測線方向（東西）、間隔ともに0.5mで走査した。

探査結果 探査の結果は、平面図を作成し、それを判読することとした。まずGPR探査は、須弥壇修理事業にともない室内に設置した単管足場や金具類、さらには礎石

や東石の影響を大きく受けた結果となっている。ただし、そうした影響が比較的軽微な部分、北端中心付近ではコの字状を呈する帯状の反応が認められ、現地表下50cm以上の状態を反映したと解される（図216左上）。

磁気探査についても、GPRと同様に周辺環境に大きな影響を受けている。また、それ以外の異常部も強い磁力を有する点状のものが多く、これらの多くは表面付近に落ちている鉄釘や銭貨などであろう。4月18日実施分についても、東西トレンチ西半南側および南北トレンチ南端付近で顕著な反応がみとめられるが、これらもトレンチ付近の表面、あるいは地割れに落ち込んだ鉄釘や銭貨などの金属製品に起因すると考えられる（図216左下）。

電気探査は、低比抵抗部の東側から西に向かうにしたがって高比抵抗部へ段階的に抵抗値が変化していく状況が確認できた。これは地下水の挙動を主因とする土壌内の水分含有量に起因するものと考えられ、とくに低比抵抗部である基壇東側において地下水の影響が大きい（図216右上）。電気探査結果と三次元計測図を合成すると、さらに具体的な土壤水分の状況が把握できる（図216右下）。

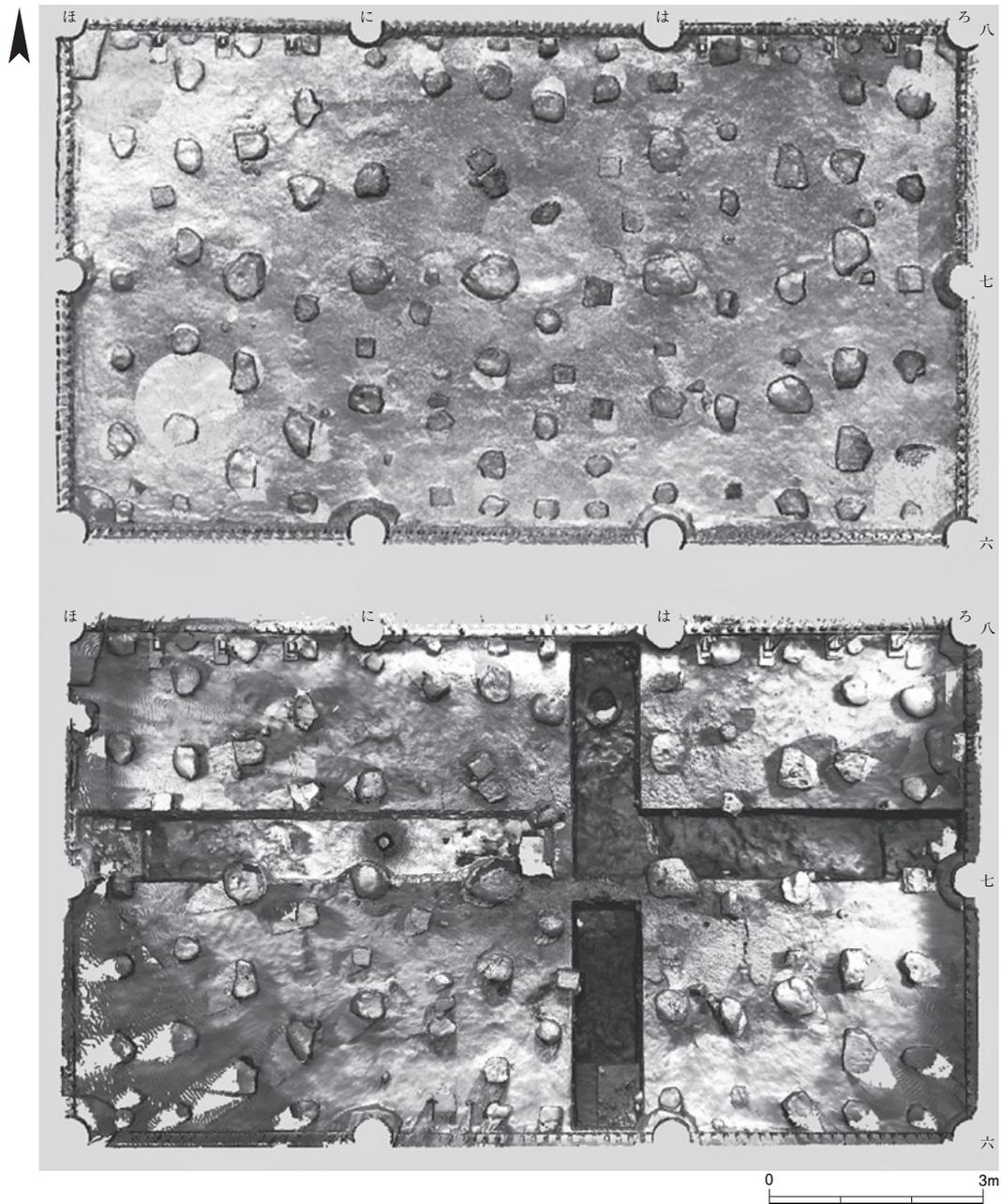


図217 三次元計測平面図 1 : 100 (上: 調査前、下: 調査後)

探査結果と発掘調査成果の照合 GPR探査結果は、地山の起伏や土坑の反応など発掘調査成果と複数合致した。具体的にみると、先に述べた北端中心付近のコの字状の反応のうち、東側の強い反射は、南北トレンチのSK9や、その周囲の岩盤が北側にやや高くなっている部分を捉えたものだろう(図216左上)。

つぎに、電気探査の結果からは、東側の低比抵抗部から西へ向かうにつれ高比抵抗部へと段階的に変化する。このことから、東側は湿潤な土壌である一方、西側は比

較的乾燥した土壌環境であることが推定できた。発掘調査の結果、東西トレンチ東側の東石や礎石は、版築層と接する部分が常時水分を含んで変色しており、かつ版築土も西側に比して常に湿潤であることが確かめられ、探査結果と合致した。さらに、湿潤な東側では亀裂が全く認められず、比較的乾燥した土壌環境にある西側に亀裂が集中することも判明した。亀裂は岩盤には達しておらず、これらのことから、亀裂と地下水の挙動との間に一定の相関性を見出すことが可能であり、すなわち亀裂は

乾燥による収縮で生じた可能性を示唆する。電気探査は、外部環境の影響を把握することに強みを発揮する手法である。今回のように、地下水の挙動をはじめとした土壌の水分分布を調べる上で電気探査が有効であり、電気探査結果は地下遺構の存否だけでなく文化財の環境調査にも応用可能なことがあきらかになった。

金属探査で得られた所見とGPR探査からの所見を総合し、金属製の物体の存在を地下に予想して発掘調査を進めたが、該当する遺物は認められなかった。こうした調査成果をふまえ、遺物以外で反応した理由として、以下の3点を考えた。

- ①亀裂内は、周囲の版築に比べて空隙があり、締りも弱く、これら硬軟の差が反射した。
- ②亀裂に落ち込んだ鉄釘などの金属製品が反射した。
- ③地山である岩盤表面に帯状に固着する二酸化マンガンを酸化鉄などは、周囲の岩盤と硬度が異なるため、その硬度の違いを投影した。

そこで、今回の調査で作成した調査区平面図と東北大学実施分も含めた金属探査結果や電気探査結果の平面図などを照合させると、東西トレンチ西半中央部付近での反射は、その形状が同位置で検出された亀裂と酷似する。よって、当該部分は亀裂を反映した可能性が高い。ただ、東西トレンチ西半東端付近や、SK8b西側の反射付近には地割れが存在せず、該当部分は地山である岩盤表面に二酸化マンガンを鉄分が帯状に固着していることから、この2ヵ所の反射は、岩盤面に沈着した物質であろう。よって、上記個所の金属探査による反応は、①と③双方が原因と考えられる。さらに、岩盤面の金属の固着や亀裂が認められない個所で強い金属反応を示した部分は、清掃調査や今回の調査で出土した鉄釘や銅線、銭貨など細かな金属製品の反射をとらえた可能性が高い。以上の点から、今回の磁気探査や金属探査による結果は、上記①・②・③すべてが要因になったと解することができる。

三次元レーザースキャナーによる計測 上記探査以外に、法華堂正堂身舎内の三次元レーザースキャナーによる計測作業も実施した。計測は、2012年4月3・4日に発掘調査前の現状(図217上)、さらに5月11日にトレンチで岩盤面を検出した状態(図217下)と、計2回実施した。使用機材は、三次元レーザースキャナーが FARO Focus3D、

点群間隔約6mm(10m先)で計測し、計測データを解析するソフトウェアに SCENE (FARO)、RapidformXOM (Rapidform) を用いた。解析に際しては、測定位置合わせ後、不要な点群を除去し、平行投影にて出力をおこなった。一見してあきらかなとおり、東石の規模や据え付けの方法、あるいは岩盤の状態や高低差が立体的かつ詳細に把握することができた。

(青木・金田明大)

5 おわりに

今回の調査成果を以下に約言する。

- ①法華堂正堂から東側の手水屋にかけての広範囲で地山を平坦に造成していたことが判明した。須弥壇下の基壇は、版築により上部ほど丁寧に硬く搗き固めていた。版築層からは、奈良時代の瓦や土器の細片が少量出土し、遺構は検出されなかった。これらのことから、法華堂の基壇は、下半が地山削り出し、上半が版築によって造成されたことがあきらかになった。
- ②地山から20cm上で礎石据付穴の掘込面を確認し、下層基壇で据付穴を設けて礎石を設置していたことがあきらかになった。
- ③礎石の据え付け状況と出土遺物から、灰白色土をのぞく基壇版築層は、確実に奈良時代中頃とされる創建段階の所産と考えられる。これは既往の研究で指摘されてきた法華堂の創建時期と大きな齟齬はない。
- ④山際に近い東西トレンチ東部は湿潤だが、東西トレンチ西側が比較的乾燥するという建物基壇内の土壌環境があきらかになった。これは調査に先行して実施した電気探査結果と照合する。また、磁気・金属探査の結果は、地割れとみられる亀裂や、亀裂に落ち込んだ鉄釘、土中の沈着物などが反応した可能性が高い。
- ⑤東石のなかには、近現代の補修にともなうものと、近世の修理にともなうものがあるが、中世までさかのぼるものは明確にしえない。灰白色土層からは近世以降の土器が出土しており、遺物が亀裂などに混入した可能性も捨象できないが、灰白色土は近世以降の造作と考えるのが穏当だろう。
- ⑥土坑、東石据付穴や塼敷の裏込めから出土したガラス小玉・琥珀片、金箔の付着した漆塗木片などは、法華堂の本尊である不空罽索観音立像に由来すると考えられる。

(大西・青木)